

ヒンドゥー・クシュ山脈の南北における土器組成の比較

岩井俊平

A Comparative Study of Pottery Assemblages from North and South of the Hindu Kush

Shumpei IWAI

本稿では、アフガニスタン東部とその周辺地域における、2～6世紀の土器組成を概観した。その結果、ヒンドゥー・クシュ山脈の北側（トハーリスタン地域）と南側（カーピシー・カーブル地域とガンダーラ地域）では、同じ時期でも出土する土器に大きな違いがあることが判明した。また、トハーリスタンの中でも、アム川の南北で時期による組成の違いが認められ、カーピシー・カーブル地域とガンダーラ地域の間でも土器組成が異なっている。これらの諸地域は、クシャーン朝やエフタルなどによって統一的に支配されていた場所であったことを考えると、彼らの支配が、土着の生活文化を変容させるものではなかったと推定できる。

キーワード：土器組成、ヒンドゥー・クシュ山脈、トハーリスタン地域、カーピシー・カーブル地域、ガンダーラ地域

In this article, I attempt to provide an overview of pottery assemblages from sites around eastern Afghanistan dating between the 2nd and 6th centuries A.D. My analysis, which includes comparisons of contemporary samples, reveals that a sharp contrast exists between the Hindu Kush pottery assemblages of the north (Tokharistan region) and those of the south (Kapisi-Kabul region and Gandhara region). In the Tokharistan region, the assemblages found in the north and in the south of the Amu Darya River differed between cultural periods. In addition, the assemblages of the Kapisi-Kabul region and those of the Gandhara region were also quite distinct. It is important to note that during this period, rulers like the Kushans and the Hephthalites controlled large regions comprising Tokharistan, Kapisi-Kabul, and Gandhara. The existence of distinct pottery assemblages in these regions suggests that the rulers did not force their subjects to alter their local lifestyles.

Key-words: pottery Assemblage, Hindu Kush, Tokharistan region, Kapisi-Kabul region, Gandhara region

はじめに

アフガニスタン、ひいては中央アジア、内陸アジアなどと一般に呼ばれる地域は、古くから定住民と遊牧民が共生してきた地域であった（図1）。様々な遊牧民が周辺地域からこの地に到来し、さらに中国やイランに興った大国の文化が流入した結果、多地域の文化が混ざり合い、「文明の十字路」とも呼ばれるようになったのである。例えば、仏教がガンダーラ地域からヒンドゥー・クシュ（Hindu Kush）山脈を越えて中央アジアに伝わったのは確実であり、実際、仏教美術の様式にも山脈の南北で共通したものが認められる。したがって、当該地域の歴史時代、特にクシャーン朝（Kushan dynasty）期以降の考古学的研究は、「文明の十字路」を象徴するような美術品の研究からアプローチされる場合がほとんどで、美術品には表れてこない土着の考古学的文化の様相は捨象される傾向があった。発掘報告書においても、土器や石器といった遺物は少量しか

報告されない場合が多く、それがさらに研究を困難にしている。

しかし今後、当該地域の発掘調査は徐々に増加することが予想され、これまで蓄積されたデータをとりあえず集成する作業は必要不可欠であると考えられる。これまで筆者は、紀元後3～8世紀頃にかけてのアフガニスタン東北部とその周辺の遺跡から出土する土器の編年や分布を検討し、中央アジアの文化の一端を明らかにしようと努めてきた。本稿では、さらにアフガニスタン中央部と東南部、及びその周辺における2～6世紀頃の土器を紹介し、それらの地域性に関するごく大雑把な素描を試みたい。

環境

アフガニスタンの中央部には、ヒンドゥー・クシュ山脈とその支脈という自然の大障壁が東西に延びている。山脈の北側は、アム川（Amu）に向かって北に流れるいくつ

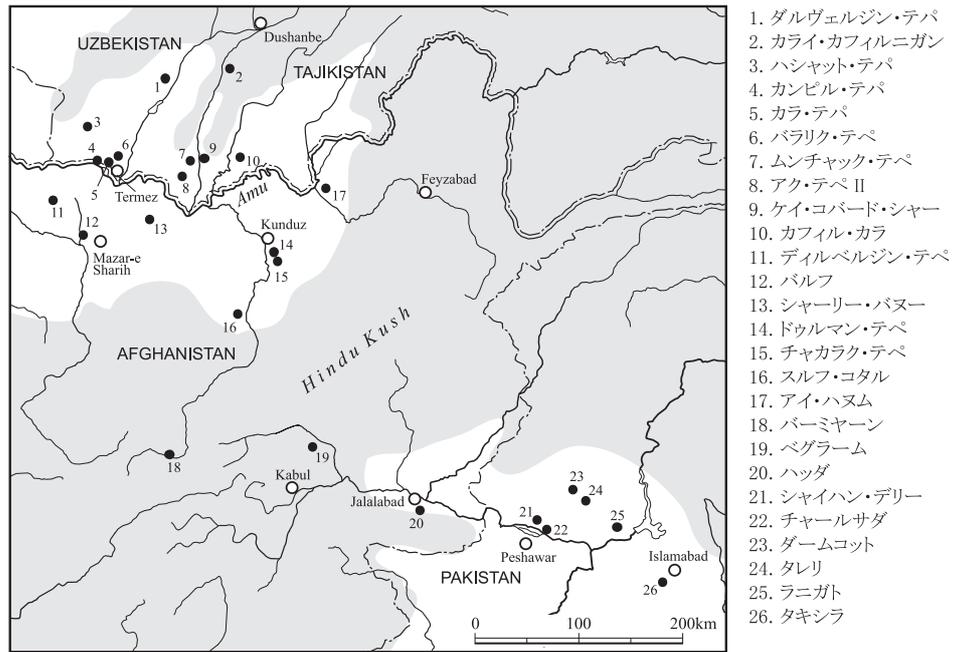


図1 関連地域地図

かの河川を利用して灌漑農耕を行うオアシス定住民と、冬営地と夏営地を季節ごとに移動する遊牧民とが共生する地域である。気候は乾燥しており、冬から春にかけて雨期がある。このような自然環境は、アム川の北側、すなわち現在のウズベキスタンやタジキスタンの南部についてもほぼ同様である。このアム川流域は、古くはバクトリア (Bactria) とカトハーリスターン (Tokharistan、漢文史料では大夏、吐呼羅、吐火羅、靛貨邏など) と呼ばれていた。本稿で扱う紀元後2世紀以降は、すでに『史記』大宛伝に「大夏」の地名が見られることから、以下ではこの地域をトハーリスターン地域と呼ぶこととする¹⁾。7世紀の前半にこの地域を旅行した玄奘は、靛貨邏国 (本稿のトハーリスターン) について「平原や險阻なところに依拠して分かれて二十七国をつくっている」と記し、続けて「原野をしきり、区分けしているけれども、みな突厥に配下として仕えている」として当時の政治状況を伝えている。また、「気候もあたたかく、・・・冬末から春初にかけてながめがつづく」という気候も描写している (桑山 1987)。

一方山脈の南側は、ゴルバンド (Ghorband) 川やパンジュシル (Panjshir) 川、そしてカーブル (Kabul) 川が集まるカーピシー・カーブル (Kapisi-Kabul) の盆地で広く農耕が行われており、遺跡が集中するものこの地域である。夏に乾燥して冬から春にかけて雨期があるのは山脈の北側平野部と同様であるが、標高が高いため、平均気温は北側と比較して低い。以下では、このカーブル周辺をカーピシー・カーブル地域と呼ぶ。玄奘は、迦畢試国 (カーピシー) について、「穀類・麦によく、果実や木も多く、

良馬やサフランを産出する」と記し (ibid.)、その土地の豊かさを伝えている。

ここから東に、カーブル川に沿って下れば、ジャラーラーバード (Jalalabad) 近辺にハッダ (Hadda) などの仏教遺跡が集中している。さらにアフガニスタン国境を東南に抜けて、パキスタンのペシャーワル (Peshawar) に至ると、インダス (Indus) 川流域とその支流に沿って広く灌漑農耕が行われている。ここでは気候は非常に温暖となり、春に加え夏にも雨が降る。以下では、このペシャーワル近辺をガンダーラ (Gandhara) 地域と呼ぶことにする。玄奘は、健駄邏国 (ガンダーラ) については、「農耕収穫ははなはださかんで花や果実はしげりみのり、さとうきびが多く氷砂糖を産出する。気候はあつく、ほとんど霜とか雪はない」と記す (ibid.)。

このように自然環境の異なる地域にあっては、生活形態や土地の生産物が異なるため、考古学的な発掘調査で出土する遺物にも当然差異があらわれる。特に最も生活形態を反映していると考えられる土器は、ヒンドゥー・クシュの南北で大きな違いを見せているのである。

さらに、同じトハーリスターンにおいても、アム川の南北で、時期によって興味深い組成の違いが認められ (岩井 2004)、山脈の南側でも、ガンダーラ地域とカーピシー・カーブル地域には違いがある。以下では、まずヒンドゥー・クシュ山脈の南北における大きな違いとともに、山脈の北側と南側それぞれの中でみられる地域性についても触れておきたい。対象とする時期は、山脈の南北がクシャーンやキダーラ・クシャーン (Kidara Kushan)、エフタル

(Hephthalite) といった遊牧民によって統一されていたと考えられる2世紀から6世紀で、おおむね2～4世紀頃を前半期、5～6世紀頃を後半期と呼んで区別する。前半期については、さらに前段階と後段階に区分する²⁾。また、土器の器形は各地域によって様々で、そのすべてを明瞭に区分することが可能な名称をそれぞれに付すことは難しく、用途の違いについても、その出土状況から明確にできるものは少ない。そこで本稿では、説明の便宜上、壺、鉢、大甕といった一般的な呼称を用い、器形の中での形態の違いについてはその都度説明を加えることとする。また、用途が明確なものについては、その名称(例えばランプなど)で呼ぶ³⁾。

紀元前3世紀から前1世紀までこの地を支配したとされるグレコ・バクトリア (Greco-Bactria) の主要都市バクトラ (Bactra) に比定されており、さらに大規模な城壁が確認されていることから、クシャーン朝期以後も中心的な都市のひとつであったと考えられている。フランス・アフガニスタン考古学調査団 (DAFA) によって発掘され、出土土器は4段階に区分されている (Gardin 1957)。出土土器を報告した J.C. ギャルダンに従えば、第II期の土器がほぼ本稿の前半期前段階、第IIIa期が前半期後段階にあたる。まずは、前半期前段階の土器を概観しよう。

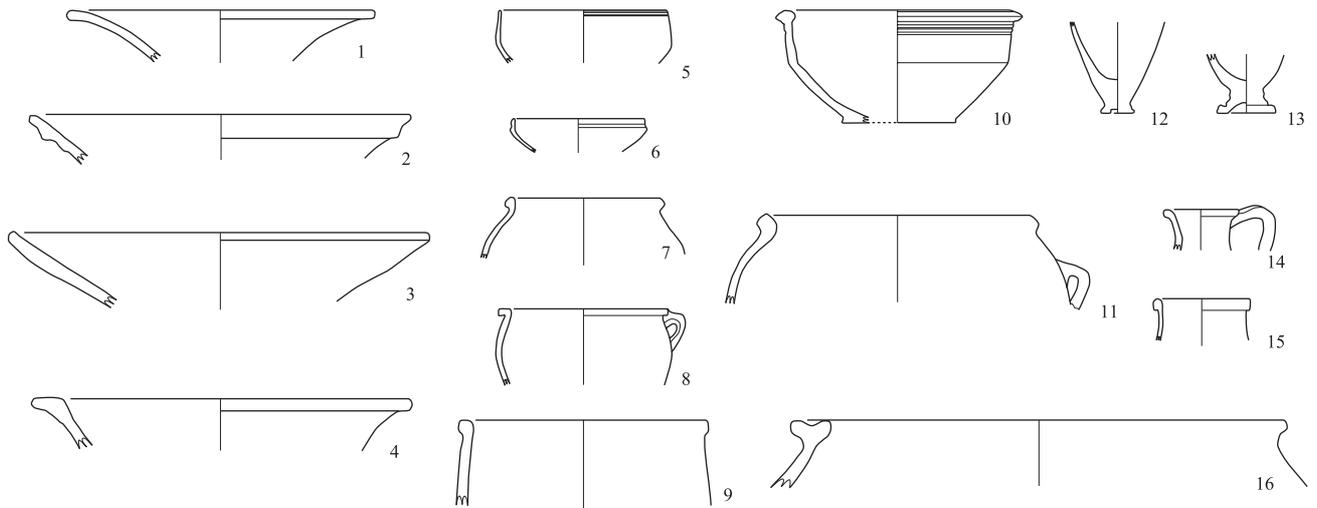
ギャルダンは、土器の全体を赤色土器、白色土器、灰色土器、施釉土器に区分し、さらに赤色土器については、ミガキの施されているものと施されていないものにと分類した。第II期の土器組成を確認すると、浅鉢 (図2-1～4, 17～19)、鉢・碗 (図2-5～11, 20～22)、高台を持つカップ形の土器 (図2-12, 13)、壺 (図2-14, 15, 23)、そして甕や鍋 (図2-16, 24～26) が主要な器形であることが分かる。このうち、数量が多いのは浅鉢と壺で、これらは赤色

トハーリスタン地域の土器組成

1. 前半期

当該地域において、前半期の土器組成を代表する遺跡は、トハーリスタン西側のバルフ (Balkh) と、東側のドゥルマン・テペ (Durman Tepe) である。まずバルフは、

バルフ II 期の土器



バルフ II 期から IIIa 期に共通して出土する土器

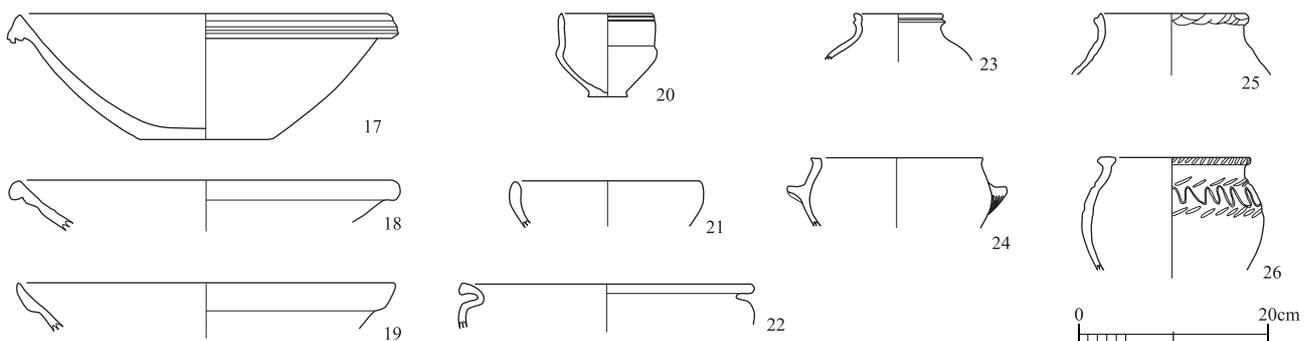


図2 バルフ出土土器の組成

または白色スリップで覆われ、ミガキが施されない (ibid: 94)。鉢は、大きく外側に開く体部を持つ浅鉢のほか、口縁部に折り返しのあるもの、内湾する体部を持つ深鉢などがみられる。小型の鉢やカップ形の土器は、赤色スリップの上からミガキが施されている。壺には短い頸部に肥厚した口縁を持つものが多く、さらに片側に把手を持つ水差し形のものがある。把手が多く出土していることから、アンフォラ形の土器も存在したであろう。煮沸用と考えられる粗製の灰色土器には、短い頸部を持つ甕、大甕、把手の付いた鍋などがみられる。

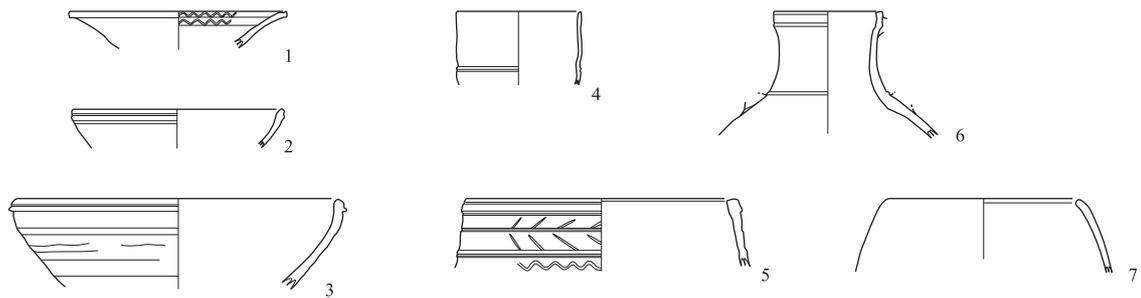
次に、ドゥルマン・テペの土器を確認する (水野編 1968)。クンドゥズの南西約9 kmの場所にあり、京都大学隊によって発掘された。全部で4層の遺構が確認され、そのうち下層であるI層とII層が、おおむね本稿の前半期前段階にあたると考えられるが、調査面積が小さく、出土土器が組成の全体像を表しているかは疑問が残る。しか

し、出土土器には浅鉢 (図3-1~3)、鉢・碗 (図2-4, 5)、アンフォラ系の両把手を持つものを含む壺 (図2-6)、甕 (図2-7) があって、小型の鉢にミガキが施される点、甕が粗製の灰色土器である点など、ほとんどバルフの土器組成と共通している。図示した以外にも、貯蔵用の大甕が出土している。

前半期後段階についても、バルフ、ドゥルマン・テペの両遺跡から出土した土器が指標となる。バルフの第IIIa期、及びドゥルマン・テペのIII層がこの段階にあたと考えられる。なおこの段階は、筆者が行った土器編年ではおおむねPK (Post Kushan) I期にあたる (岩井 2003)。まずバルフの第IIIa期を概観する。

土器組成は、前段階の第II期と比べ、次のような変化がみられる (図2)。すなわち、ミガキの施されたカップ形の土器と、浅鉢のうち、黄白色の胎土に赤白色スリップがかけられるものが姿を消す。そして、赤色土器の中に、

ドゥルマン・テペI層の土器



ドゥルマン・テペIII層の土器

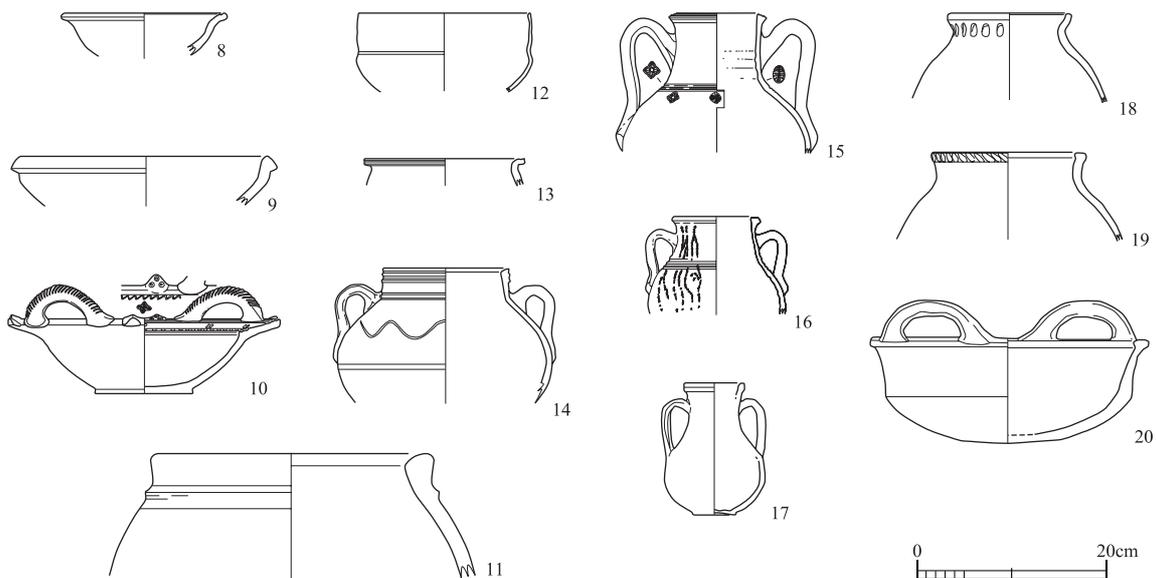


図3 ドゥルマン・テペ出土土器の組成

様々な装飾を施された浅鉢と、小型のスタンプ装飾を施された土器が出現する (Gardin 1957: 19-21, Planche XIII)。灰色粗製土器は継続して出土するが、この時期を最後に姿を消してしまうという (ibid: 53, 95)。

ドゥルマン・テペの III 層は、バルフよりもまとまった資料が出土している (水野編 1968)。その土器組成を確認すると、ミガキの施されない浅鉢 (図 3-8, 9)、把手を持つ装飾を施された浅鉢 (図 3-10)、鉢・碗 (図 3-12, 13)、両把手を持つものを主体とする各種の壺 (図 3-14 ~ 17)、甕・鍋 (図 3-11, 18 ~ 20) などがある。注目すべきは、装飾を施された浅鉢 (図 3-10) と、小型のスタンプ装飾 (図 3-10, 15) の出現で、これはバルフの様相とまったく同一である。

2. 後半期

後半期の土器組成を代表する遺跡は、チャカラク・テペ (Chaqalaq Tepe) の出土土器である (樋口・桑山 1970)。チャカラク・テペは、先述したドゥルマン・テペの南約 2 km の場所にあり、京都大学隊によって発掘された。下層、中層、上層の 3 時期が確認され、特に中層期が本稿の後半期を代表する。なお、ドゥルマン・テペとチャカラク・テペに時期差があって、両遺跡がトハーリスタン地域 (バクトリア地域) の土器編年の指標となることは、かつて筆者が検証しており、本稿の後半期は PK II 期にあたる (岩井 2003)。

土器組成を確認すると、ミガキが施されず、把手の付いた浅鉢 (図 4-1, 2)、鉢・碗 (図 4-3 ~ 6)、両把手を持つものを中心とした壺類 (図 4-7 ~ 12)、貯蔵用の大甕 (図 4-15)、煮沸用の甕 (図 4-14) に加え、片把手の水差し (瓶) (図 4-13) が出現している。この瓶は、サーサーン銀器にみられる水瓶を模倣した土器と考えられており、数量的にも多く出土している。土器組成の中にこの器形が含まれるようになることは、トハーリスタン地域に西側からの影響が大きく現れていることを示している。一方で、粗製土器のうち把手の付いた鍋が姿を消し、甕のみが残っている。この事実は、バルフにおいて前半期までに灰色粗製土器が消滅することとも関係していると考えられる。また、これまで頻繁に使用されていた小型のスタンプ装飾は姿を消し、暗文によって器面を装飾する技法 (図 4-5, 7, 13) が急増している。特に小型の鉢に施される暗文は特徴的で、この時期のトハーリスタンでは各地の遺跡から出土する。この暗文による装飾技法は、前半期にもみられるが、後半期になって非常に一般的となった。

3. トハーリスタン北側との比較

次に、同じトハーリスタンの北側、すなわち現在のウズベキスタン南部、タジキスタン南部の土器組成はどのようなものであろうか。まず、前半期前段階を代表する遺跡として、アム川北岸にあるカンピル・テパ (Kampyr Tepe) を挙げるができる。ウズベキスタンの調査団

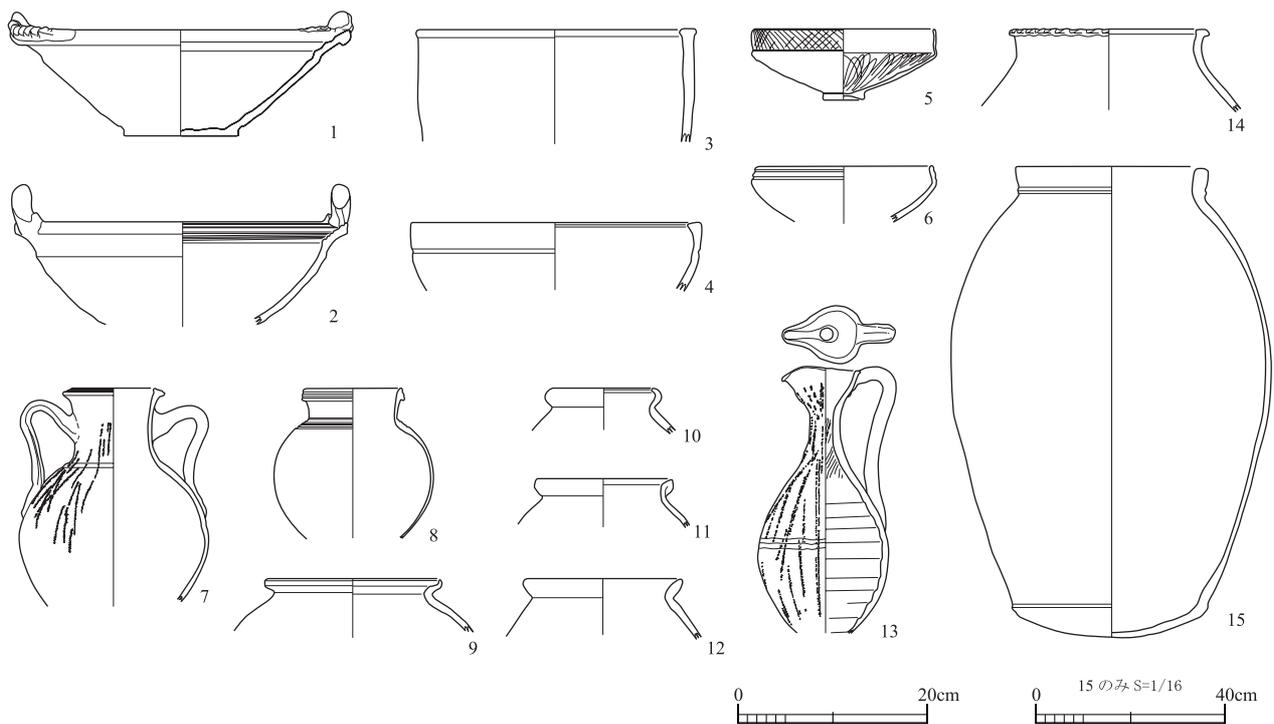


図 4 チャカラク・テペ中層期出土土器の組成

によって近年発掘が進行しており、出土土器もその一部が公開されている (Цепова 2000, 2001 など)。土器全体の報告はなく、発掘地区ごとに代表的な土器を紹介しているだけなので、土器組成の全容をつかむことは残念ながらできない。しかし、個別の報告によって検討すると、浅鉢 (図5-1)、鉢・碗 (図5-2, 3) 両把手を持つものを含めた壺 (図5-5, 6)、貯蔵用の大甕 (図5-4) などがあって、南側の土器組成とほぼ同一である。しかし、南側にはみられない胴部に注口を持つ壺 (図5-7)、高台を持つ皿形の土器 (図5-8)、三足の燭台 (図5-9) や壺 (図5-10) などが報告されている。さらに、こうしたアム川の南側ではみられない土器の多くは、黒色スリップが施されており、非常に特徴的である。また、この段階からすでに小型のスタンプ装飾 (図5-6, 8) が用いられている点も、南側とは大きく異なる。

(図5-8)、三足の燭台 (図5-9) や壺 (図5-10) などが報告されている。さらに、こうしたアム川の南側ではみられない土器の多くは、黒色スリップが施されており、非常に特徴的である。また、この段階からすでに小型のスタンプ装飾 (図5-6, 8) が用いられている点も、南側とは大きく異なる。

前半期後段階から後半期を代表する遺跡としては、タジキスタンのアク・テベ II (Ak Tepe II) 遺跡を挙げることができる⁴⁾。ここでは、浅鉢 (図6-1)、把手を持つ装飾

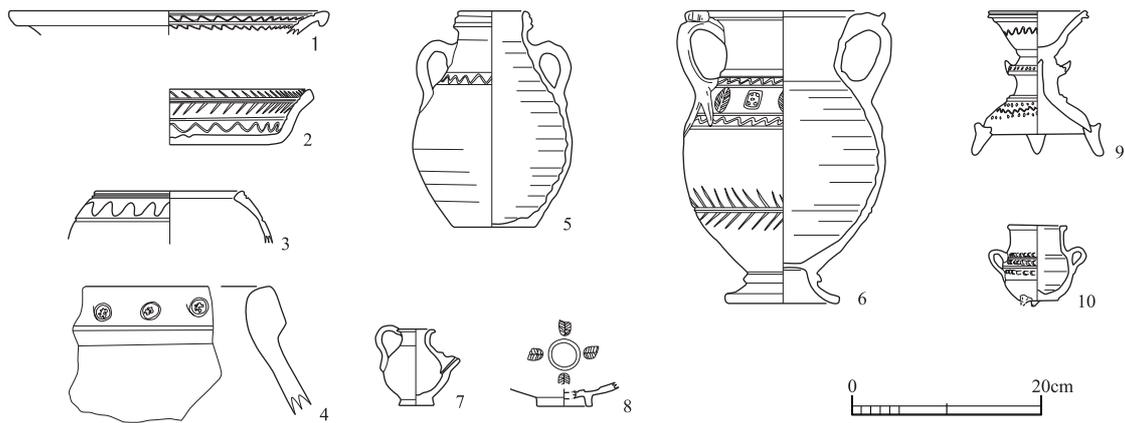


図5 カンビル・テパ出土土器の組成

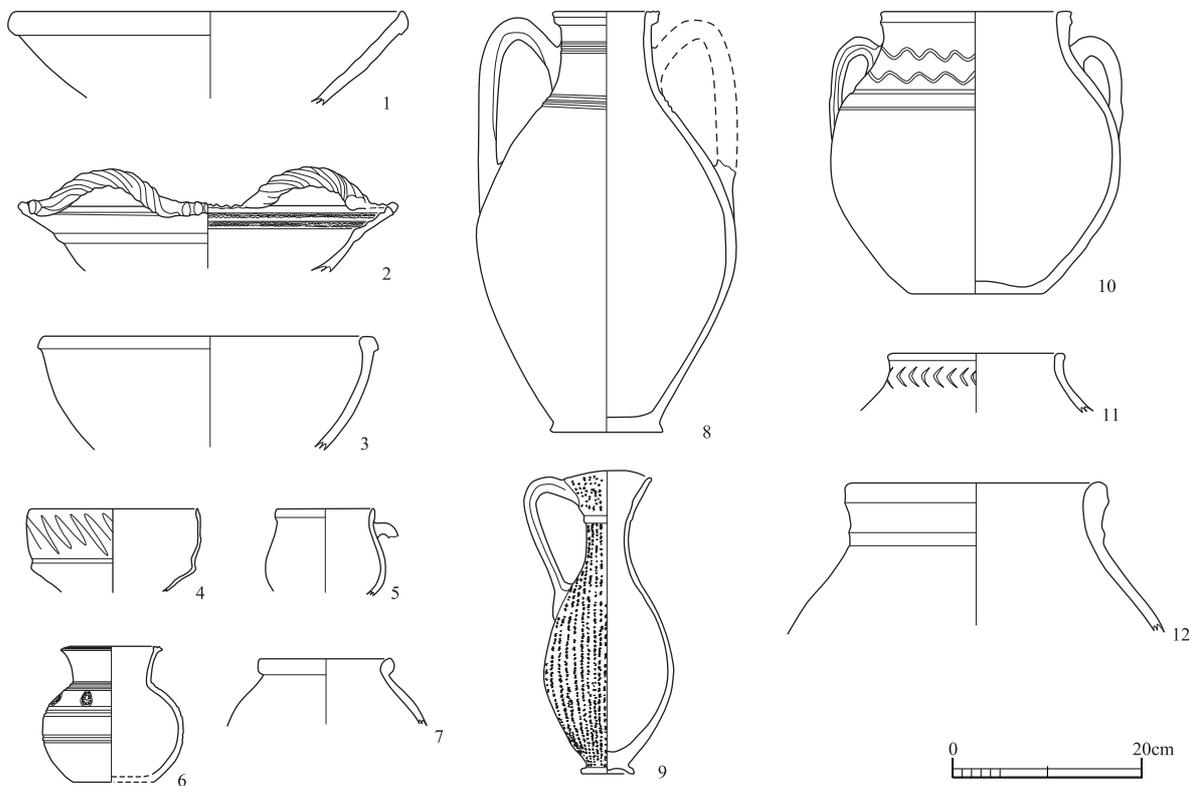


図6 アク・テベ II 出土土器の組成

された浅鉢 (図 6-2)、鉢・碗 (図 6-3～5)、両把手を持つものを含む壺 (図 6-6～8)、片把手の瓶 (図 6-9)、甕 (図 6-10～12) がみられ、土器組成としても、南側とほとんど同一となる。このうち9の資料は、後半期に属するものであろう。

後半期の土器組成の全容を知ることのできる遺跡はほとんどないが、ハシャット・テパでは一部の土器が報告されている (Annaev 1988)。浅鉢 (図 7-1)、暗文を施されたものを含む鉢・碗 (図 7-2～4)、そして両把手を持つものを含む壺 (図 7-5～8) が認められる。こうした組成は、アク・テペ II 遺跡と同様に、アム川の南側とほとんど同一である。

時期がやや遅れて7世紀頃になると、ダルヴェルジン・テパ (Dal'verzjin Tapa) の城塞出土土器によって土器組成の全容を知ることができるが、北トハリスターンにはさらに北側のソグド地域の土器がしばしば出土するようになる (岩井 2004)。こうした土器はトハリスターン南側では出土せず、前半期前段階と同様、南北に再び違いが現れているのが分かる。

4. 小結

以上のように、トハリスターン地域では、基本的に浅鉢、鉢・深鉢・碗、両把手を持つものを含む壺、貯蔵用の大甕、粗製の甕が継続して用いられ、前半期にはカップ形の

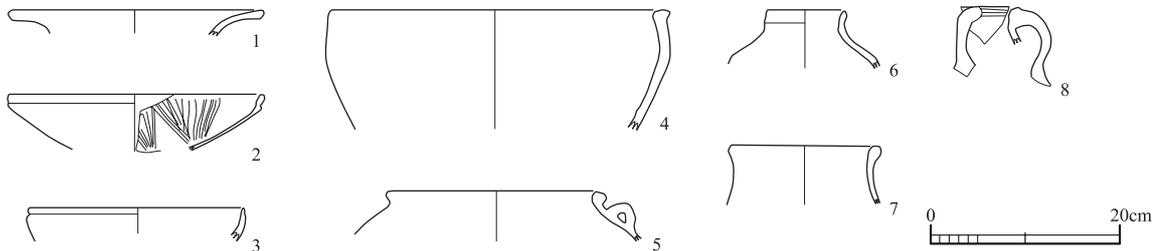


図7 ハシャット・テパ出土土器の組成

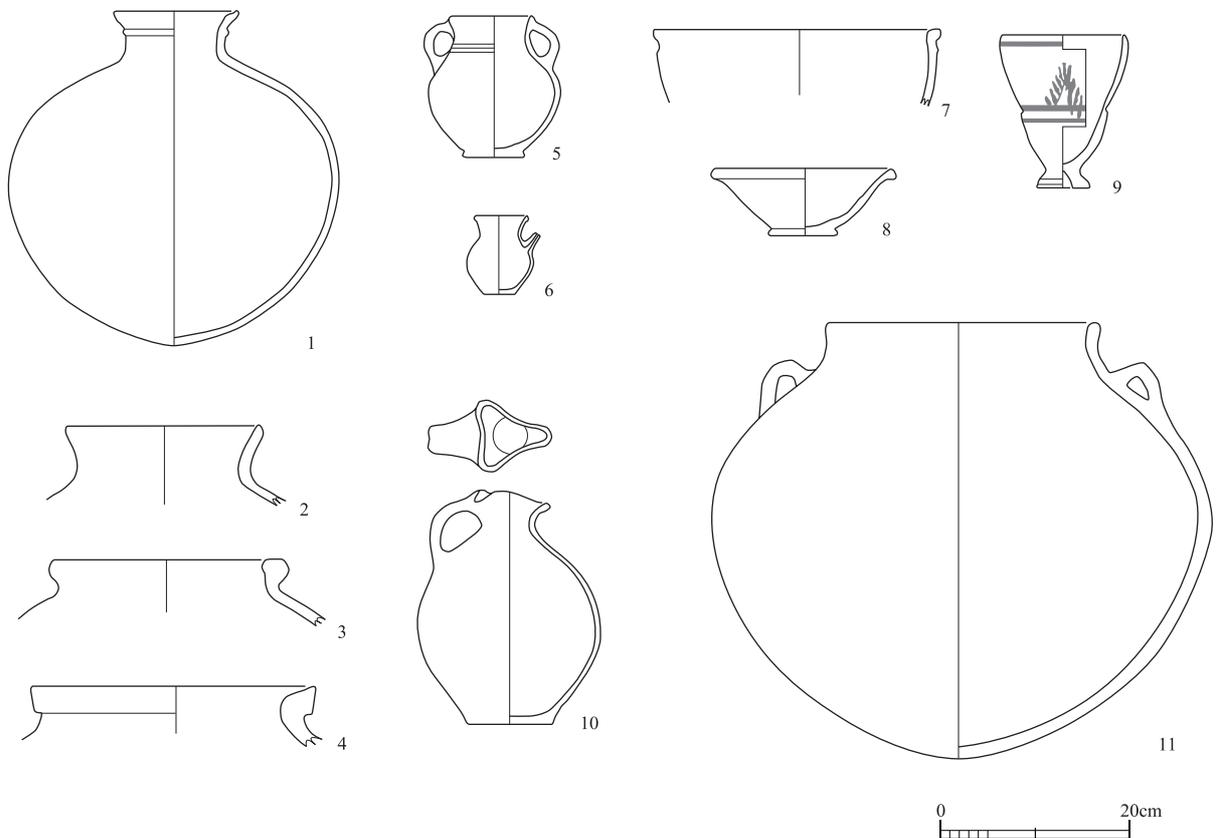


図8 ベグラーム II 期出土土器の組成

土器や粗製の壺、鍋が、後半期には片把手の瓶がこれに加わる。出土量が多いのは、どの遺跡でも浅鉢と壺類である。また、前半期にみられた小型のスタンプ装飾は、後半期には姿を消している。この様相は南北トハリスタンで基本的に一致するが、前半期前段階においては、一部の器形と小型のスタンプ装飾が北側でのみ見られることが確認された。

ヒンドウ・クシュ山脈南側の土器

1. 前半期

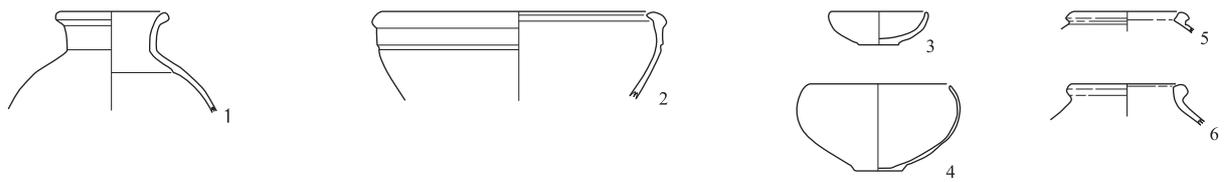
まず、カーピシー・カーブル地方の土器を概観すると、本稿の前半期を代表する遺跡は、カーピシー・ベグラム (Begram) であろう。長年にわたって DAFA による発掘が行われ、特に王宮から出土した「遺宝」によって有名である。しかし、遺宝以外の具体的な出土遺物の全容はほとんど報告されておらず、土器についても、時期別に特徴的なものが掲載されるのみである。R. ギルシュマンの言う第 II 期 (Ghirshman 1946) が本稿の前半期にあたりと考えられるので、ここではその時期の土器として掲載されているものを概観する⁵⁾。土器組成としては、やや長い頸部を持つ丸底の壺と、両把手を持つ壺が主体となるようである (図 8-1, 5)。これに加えて、外側に反る口縁を持つ壺または壺 (図 8-2 ~ 4)、胴部に注口を持つ壺 (図 8-6)、鉢・碗 (図 8-7, 8)、彩文の施されたカップ形土器 (図 8-9)、片把手の瓶 (図 8-10)、小型の両把手を持つ丸底甕 (図 8-11) などがみられる。片把手の瓶は、その器形から考えて、ト

ハリスターンの後半期にみられる瓶とはまったく別系統のものと考えられる。また、胴部に注口を持つ壺については、カンピル・テパ出土のものと類似しており、今後両者の関係を追求していく必要がある。

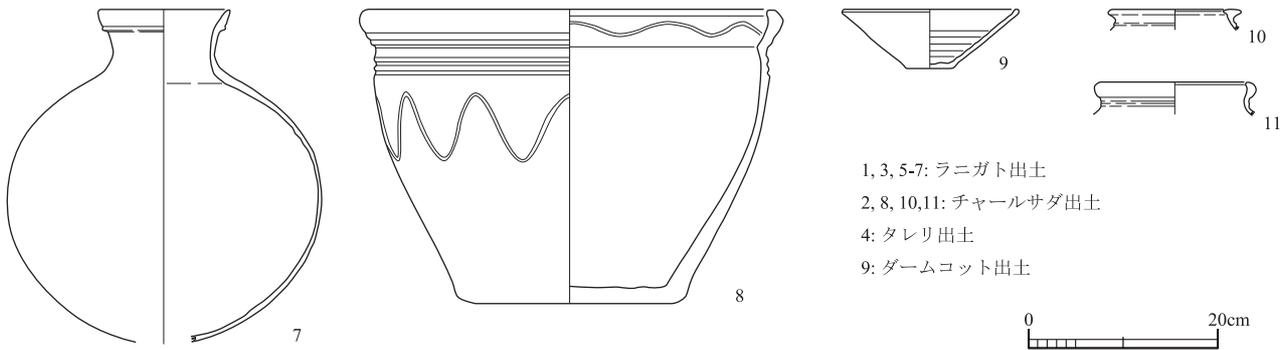
ガンダーラ地域では、パキスタンのチャールサダ (Charsada) (Wheeler 1962) や、周辺の都城・仏教寺院において層位的な発掘が多く行われており、その土器組成を明らかにすることが可能である (Dani 1965-66; 京都大学学術調査隊 1986, 1988 など)。土器編年については、難波洋三によって長期の編年網が組まれており (難波 1986)、本稿ではそれを利用することとする⁶⁾。また、チャールサダやシャイハン・デリーといった都城址の出土資料と、ラニガトやタレリといった仏教寺院址の出土資料を比較しても、大きな差異は認められないので、両者をあわせ、この地域の土器組成と考えたい。

土器組成を概観すると、やや長い頸部を持つ丸底の壺 (図 9-1)、大型の深鉢 (図 9-2)、ランプ (図 9-3)、小型の鉢・碗 (図 9-4)、そして外反口縁を持つ甕 (図 9-5, 6) が主体となっている。特に壺の出土量が多く、口縁にも様々な形態がみられる。カーピシー・カーブル地域と比較すると、以下のような違いが認められる。まず、ガンダーラ地域では、カップ形土器と片把手の瓶がこれまでのところ出土していない。アンフォラ系の両把手を持つ壺は、インダス川を東に越えたタキシラ (Taxila) のシルカップ (Sirkap) 遺跡では出土しているが、その形態はベグラム遺跡のものとは大きく異なっている。また、大型の深鉢

ガンダーラ地域の前半期の土器



ガンダーラ地域の後半期の土器



- 1, 3, 5-7: ラニガト出土
- 2, 8, 10, 11: チャールサダ出土
- 4: タレリ出土
- 9: ダームコット出土

図 9 ガンダーラ地域出土土器の組成

は、カーピシー・カーブル地域に比べ、出土量が多いようである⁷⁾。このように、両地域は異なる土器組成を持っているものの、壺類が組成の主体となることは両地域で共通している。また、これまでの完形品の出土例から考えると、この壺は把手を持たない丸底のもので、ヒンドゥー・クシュ山脈北側で出土する壺とは異なる。

2. 後半期

カーピシー・カーブル地域で、本稿の後半期に属すると考えられる遺跡は、テペ・マランジャン (Tepe Maranjan) (Hackin et al. 1959) やサカ城塞址 (Fortress of Saka) (ibid.) など、いくつかを挙げるができるが、残念ながら出土土器についてはほとんど報告されていない。したがって、土器組成全体については何も指摘することができないが、この時期にカーピシー・カーブル地域で流行した土器の装飾に、大型の円形スタンプ装飾を挙げることができる (Kuwayama 1974a; 桑山 1990)。前半期から継続して使用されている、頸部の長い丸底の壺に押印されるもので、上述した遺跡のほか、ベグラームの第 III 期 (Ghirshman 1946) やタパ・スカンダル (Tapa Skandar) (Kuwayama 1974b; 桑山 1989) で大量に出土している。この大型の円形スタンプ装飾は、ヒンドゥー・クシュ山脈の北側にも少量出現するが、北側では大甕の口縁に施されるなど、使用法が異なっている。

ガンダーラ地域では、引き続きチャールサダや周辺の仏教遺跡出土土器から、全体の土器組成を考察することが可能である。それによれば、土器組成には前半期と比べて特筆すべき変化はみられない (図 9)。また、壺がもっとも多く出土するものの、カーピシー・カーブル地域で頻繁に使用される大型の円形スタンプ装飾は一切施されない。後半期にいたっても、両地域は異なる土器文化圏を形成しているのである。

3. 小結

ヒンドゥー・クシュ山脈南側では、カーピシー・カーブル地域とガンダーラ地域で、土器組成に一定の違いがあることが判明した。共通する器形としては、頸部のやや長い丸底の壺が挙げられるが、後半期にはこの壺に対する装飾方法がまったく異なっているのである。ここで注意しなければならないことは、カーピシー・カーブル地域とガンダーラ地域は、それぞれがクシャー王の夏の都と冬の都であったと認識されていることである。すなわち、たとえ王がこの両地域間を移動していても、それぞれの地域の風土に合わせて選択されている生活文化の域までは、影響を与えることがなかったということである。これは、ヒンドゥー・クシュ山脈の南北における違いについても同じことが

言えるであろう。

まとめ

ここまで見てきたように、ヒンドゥー・クシュ山脈の南北では、土器組成に差異が認められる。北側で組成の主要な位置を占める浅鉢は、南側ではこれまでのところ報告されておらず、壺の形態も異なっている。このように土器組成が異なる原因は様々であろうが、自然環境や気候による生活文化の違いに起因する部分は大きいと考えられる。

さらに、ヒンドゥー・クシュ山脈の北側の中でも、アム川の南北で時期によって異なる土器組成が確認できるし、ヒンドゥー・クシュ山脈の南側の中でも、カーピシー・カーブル地域とガンダーラ地域では、土器組成の違いが認められる。

はじめに述べたように、本稿で対象とした時期は、山脈の南北がクシャーやキダラ、エフタルといった集団によって統一されていたとされる 2 世紀から 6 世紀である。こうした勢力が、政治的には山脈の南北を統一的に支配していても、生活文化の内容までが統合される訳ではなかったことも指摘できる。このことは、支配者側民族の大規模な移住や、厳密な度量衡の統一といったことが行われなかった可能性を示唆している。紀元前、ギリシア人が中央アジアに移住し、さらにヒンドゥー・クシュ山脈を南に越えてガンダーラ地域にまで到達したとき、周辺の土器組成は大きく変化したと古くから考えられてきたが (Gardin 1957: 93; 桑山 1966: 44)、これは、支配する側の人々が大規模な移住を行った結果なのであろう。

その一方で、前半期前段階においては、高台を持つコップ形の土器や胴部に注口を持つ壺など、特徴的な器形にヒンドゥー・クシュ山脈の南北で共通性が認められる場合もある⁸⁾。また、後半期において、ヒンドゥー・クシュ山脈の南側で壺に施される大型の円形スタンプ装飾が、少量ながら山脈の北側で認められる例についても先に触れた。このような共通性がどのような原因で生まれるのかは、出土資料の増加をまって慎重に検討しなければならないが、こうした資料を用いて、山脈南北の交流・交易を追求することは今後の課題である。さらに、仏教美術やヒンドゥー教美術などが、土器に表れた生活文化の違いを越えて、山脈の南北で共通していることについても、同様に検討していかなければならない。

註

- 1) この名称については、桑山 1987、岩井 2004 を参照。
- 2) 本稿の目的は、アフガニスタン東部とその周辺地域のおおまかな土器組成の違いを指摘することであるから、年代についてはごく簡単に提示するにとどめる。なお、前半期後段階から後半期の土器編年については岩井 2003 を参照。

- 3) 壺、鉢といった名称の付け方は、研究の対象となる地域や時代によって慣例的に行われているもので、その全体に通用する厳密な分類を行うには、ゆうにひとつの論考が必要となるだろう。例えば、本稿で参照している各種報告書についてみると、ほぼ同じ器形の土器に対して、異なる名称を与えている場合が少なくない。これらの全般的かつ厳密な分類は未完であるため、本稿では、本文に示したような呼称方法を採用することとする。
- 4) この遺跡は、3時期にわたる遺構が層位的に確認されているが、土器の報告においては、下層の2時期を一括して報告している(セドフ 1987: 117; 岩井 2003: 52)。したがって、本稿の図6は、前半期後段階から後半期までの土器が含まれている。
- 5) この絶対年代についても様々な議論があるが、II期はベグラーム遺宝が所属する時期であり、本稿の前半期前段階におおむね相当すると考えて問題ない。ただし、III期については、ギルシュマンが提出する5世紀までの年代ではなく(Ghirshman 1946: 99-108)、7世紀にまで下がるので(Kuwayama 1974a; 桑山 1989)、本稿の対象からははずれる。
- 6) この編年は、壺の口縁の形態と層位を基準にし、絶対年代については、遺構出土の貨幣と法顕や玄奘のガンダーラ地域に関する記述を参照して決定されたものである。細かな画期については今後の研究である程度修正されることも考えられるが、前半期と後半期というおおまかな分類については変更の余地はないであろう。
- 7) ベグラームの土器の報告(Ghirshman 1946)では、この図8-7に示した1点のみが、ガンダーラ地域の深鉢と共通する形態を有している。しかし、先述したとおり、このベグラームの報告が出土土器の数量まで考慮に入れているかどうかは判断できない。
- 8) 特にコップ形土器については、その共通性が古くから指摘されてきた(Gardin 1957: 23-25; 水野編 1968: 36-38)。しかし、ヒンドゥー・クシュ山脈北側では、この土器は墓の副葬品として出土する 경우가多く、山脈の南側とは異なる系統のものとも考えられる。今後の検討課題であろう。

参考文献

- Аннаев, Т. Д. 1988 *Раннесредневековые Поселения Северного Тохаристана*. Ташкент, Издательство "Фан" Узбекской ССР.
- Брыкина, Г. А. (ред.) 1999 *Средняя Азия в Раннем Средневековье*. Москва, Издательство Наука.
- Dani, A. H. 1965-66 Shaikhan Dheri Excavation. *Ancient Pakistan* vol.2: 17-214.
- Дьяконов, М. М. 1953 Археологические Работы в Нижнем Течении Реки Кафирнигана (Кобадан) (1950-1951 гг.). *Материалы и Исследования по Археологии СССР* 37: 253-293.
- Gardin, J.-C. 1957 *Céramiques de Bactres*. Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan, tome 15. Paris, Librairie C. Klincksieck.
- Ghirshman, R. 1946 *Begram. Recherches Archeologiques et Historiques sur les Kouchans*. Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan, tome 12, Cairo, Imprimerie de l'Institut Français d'Archéologie Orientale.
- Ghosh, A. 1948 Taxila (Sirkap), 1944-5. *Ancient India* 4: 41-84.
- Grenet, F. 2002 Regional Interaction in Central Asia and Northwest India in the Kidarite and Hephthalite Periods. In: Sims-Williams, N. (ed) *Indo-Iranian Languages and peoples*. Oxford, Oxford University Press, pp. 203-224.
- Hackin, J., Carl, J., Meunié, J. 1959 *Diverses Recherches Archéologiques en Afghanistan (1933-1940)*. Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan, tome 8, Paris, Presses Universitaires de France.
- Кругликова, И. Т. 1974 *Дильбержин*. Часть 1. Москва, Издательство Наука.
- Кругликова, И. Т. & Г. А. Пугаченкова 1977 *Дильбержин*. Часть 2. Москва, Издательство Наука.
- Kuwayama, S. 1974a Kapisi Begram III: Renewing its Dating. *Orient: Report of the Society for Near Eastern Studies in Japan* 10: 57-78.
- Kuwayama, S. 1974b Excavations at Tapa Skandar: Second Interim Report. In: *Kyoto University Archaeological Survey in Afghanistan 1972*. Kyoto, Kyoto University, 5-13.
- Minorsky, V. (tr.) 1970 *Hudud al-'Alam* (2nd ed). London, MESSRS. Luzac & Company, LTD.
- Пугаченкова, Г. А., Э. В. Ртвеладзе и др. 1978 *Дальверзинтепе*. Ташкент, Издательство "Фан" Узбекской ССР.
- Седов, А. В. 1987 *Кобадан на Пороге Раннего Средневековья*. Москва, Главная Редакция Восточной Литературы.
- Соловьев, В. С. 1996 *Раннесредневековая Керамика Северного Тохаристана*. Елец, Елецкий Государственный Педагогический Институт.
- Цепова, О. 2000 Декорированная Керамика Кампыртепа. *Материалы Тохаристанской Экспедиции*. Выпуск 1: 107-122.
- Цепова, О. 2001 Керамика со Штампованным Орнаментом из Кампыртепа. *Материалы Тохаристанской Экспедиции*. Выпуск 2: 101-112.
- Wheeler, Sir M. 1962 *Charsada*. Oxford, Oxford University Press.
- 岩井俊平 2003 「ポスト・クシャン期バクトリアの土器編年」『西アジア考古学』第4号 41-54頁。
- 岩井俊平 2004 「トハリスターンにおける地域間関係の考古学的検討」『西南アジア研究』No. 60 1-18頁。
- 榎一雄 1958 「キダラー王朝の年代について」『東洋学報』第41巻3号 1-52頁。
- 京都大学学術調査隊 1986 『GANDHARA ガンダーラ仏教遺跡の総合調査概報』京都大学。
- 京都大学学術調査隊 1988 『GANDHARA 2 ガンダーラ仏教遺跡の総合調査概報』京都大学。
- 桑山正進 1966 「Gandhara における土器の様相」『西南アジア研究』16 31-52頁。
- 桑山正進 1987 『大唐西域記』(訳注) 大乘仏典 中国・日本編9 中央公論社。
- 桑山正進 1989 「7世紀におけるベグラームの存立」『西南アジア研究』30 21-55頁。
- 桑山正進 1990 『カーピシー=ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所。
- シャキル・ピダエフ(加藤九祚訳) 2001 「ザール・テパ都城址」『アイハヌム』2001 27-44頁。
- 創価大学・ハムザ記念芸術学研究所編 1996 『ダルヴェルジンテパ DT25(1989-93 発掘調査報告)』創価大学。
- 田辺勝美・堀咲他 2000 「ダルヴェルジン・テパの発掘(1999年度調査の概報)」『古代オリエント博物館研究紀要』20巻101-162頁。
- 田辺勝美・山内和也他 2001 「ダルヴェルジン・テパの発掘(2000年度調査の概報)」『古代オリエント博物館研究紀要』21巻89-151頁。
- 難波洋三 1986 「土器についての概要」京都大学学術調査隊 『GANDHARA ガンダーラ仏教遺跡の総合調査概報』48-65

頁 京都大学。
樋口隆康・桑山正進 1970『チャカラク・テペ』京都大学。
前田耕作・田辺勝美編 1999『世界美術大全集 東洋編』15 中央ア
ジア 小学館。
水野清一編 1962『ハイバクとカシュミル-スマスト』京都大学。

水野清一編 1968『ドゥルマン・テペとラルマ』京都大学。
水野清一編 1971『バサーワルとジェラーラーバード-カーブル』
京都大学。

岩井俊平

独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所

Shumpei IWAI

Independent Administrative Institution

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo